

# 日本社会心理学会会報

231号



発行 日本社会心理学会 <http://www.socialpsychology.jp/>  
編集・制作 広報委員会 (担当常任理事：内田由紀子)

2023年6月27日

## 第32期役員あいさつ

2023年4月より第32期役員体制が始動しました。西田会長ならびに6名の常任理事から会員の皆様へ、ご挨拶を申し上げるとともに、学会全体と今後の活動についてご説明申し上げます。

### 会長

西田 公昭



このたび、新会長に就任するにあたりまして、会員の皆様に御挨拶申し上げます。日本社会心理学会は、実は私の誕生年である1960年に発足し、現在では約1600名の会員が活動しておられます。そんな会員各位の熱心な研究成果に支えられ、これまで大きく発展してまいりました。心理学部や社会心理学科もまったく新しい時代に学んだ者として、たいへん喜ばしい現状だと感じています。しかしながら、学会の将来を見据えたとき、気になる事柄もいくつか浮かんでまいります。

まずは機関誌「社会心理学研究」への投稿数が大きく減少していることです。これは待ったなしで、その改善策に取り組まないとなりません。とはいえ、その改善策は確定しているものではなく、今後も多くの会員からの幅広いご意見を賜り、もっと投稿したいと動機づけられる雑誌に戻りたいと考えています。各会員におかれましても、どうか積極的にアイデアを出していただきたいと存じます。

あくまでも私見ですが、査読体制が抱える問題もありますが、機関誌の存在意義を問い直すことも検討すべきではないかと思っています。時代の変遷の中で統計解析手法の高度な発展が見られます。科学論文雑誌として、当誌の水準を下げるべきという主張では決まてないのですが、国際的な読者が望める英文誌への投稿者が増えています。そんな状況で、和文の論文では、国内の社会問題にコミットして何らかの社会貢献に寄与するような研究をもっと高く評価し、分析や方法が完璧ではない場合も、審査の中で支援したり、今後の課題として方途を示したりすることで掲載する方が有意義だと思います。

また他には、当会会員の活動の場の確保についても憂慮しています。新たな研究の場を広げるためには、もっとさまざまな問題を抱える会員外の人々と交流して、社会心理学的なソリューションやその出し方に魅力を抱いてもらう努力がいるかと思っています。もちろん我々の知見には科学的エビデンスが不足しているときもあり、それに誠実に向き合うことは大事です。すなわち、実験における再現性の問題ですね。しかし、それと同時に、社会心理学研究成果の実践が社会の向上に寄与する可能性があることを大いにアピールするべきではないでしょうか。つまり、再現できない失敗は現象が存在しないことを直ちに示しているのではないのであり、恐れずに、当会の存在感を一般社会にもっと高めることが、研究の場を広げることになると思うのです。私の経験では、会員外の人々には、社会心理学の独自性や有効性が正しく理解されていない場合も少なくなく、他の心理学や隣接科学に吸収されたりすることもあります。例えば、公認心理師資格の科目「社会・集団・家族心理学」では、当会は科目を2つに分離する要望を提出していますが、まだ実現していません。

なお一般に、研究環境が徐々に厳しさを増してきている会員も多くなってきているのではないのでしょうか。日々の学務まじりや雑務に追われ、研究時間の確保や学生指導にじっくりと取り組むことが困難になっているとの意見に遭遇することが増えています。そのためには、本学問が社会的に価値のあることをもっと経営母体や事務サイドに対してもアピールしてゆきたいものです。我々が現状の発展にあぐらをかいて、その努力を怠り、研究に従事する環境の確保に理解を得られないと、他の業務に追われて自滅していくのみではなく、後進の若い会員の研究場所さえ確保できなくなっていくのではないかと懸念しています。

ようやくコロナ禍の終息が見えてきた昨今、せつかくの御挨拶なのに暗い話ばかりになって申し訳ありません。私もはなはだ不束者ではございますが、このような苦境を明るく乗り越えて、さらなる当学会の発展に貢献できるように、精一杯、頑張りたいと思っています。ただ、わずか2年任期なので、何ができるのかとも思います。危機意識の共有だけでもなかなか到達するのは困難かも知れません。ぜひ、会員御一同におかれましては、見かけた折はもちろんのこと、メールやSNSを通じてでも良いかと存じますので、御意見、御指導、御鞭撻のほどをお気楽にいただけたらありがたいです。何卒、どうかよろしくお願ひ申し上げます。

(にしだ きみあき・立正大学)

## 事務局担当

谷口 淳一



今期、事務局を担当させていただくことになりました谷口です。他の先生方も同じ思いかもしれませんが、昨年、いや半年前にまさかここでコメントを書いている自分の姿は想像できていませんでした。ですが、コロナ禍前の2019年11月に現会長の西田先生を大会委員長に立正大学で盛大に開催された第60回大会の際にまさか数か月後に世界中が大変なことになるとは誰も想像できなかったわけですし、そんなものなのかもしれません。

個人的な話をさせていただくと、大学院生だったちょうど20年前に大坊郁夫先生のもと事務局幹事を担当していました。当時の記憶はだいぶんと朧げになっていますが、大坊先生について常任理事会に出席させていただき、会長であった高木修先生をはじめ著名な先生方とお話をする機会をいただけたことが嬉しかったことや、総会の前の日に配付資料の誤りに気づき、研究室の仲間たちを総動員して資料の差し替えをしたことなどが懐かしい思い出です。ですので「事務局」にそれほど悪いイメージはありませんでした。

ただ、実際に事務局担当が決まると多くの先生方から「大変ですね」と労いの言葉をいただき、そのたびに「そんなに大変なのか」と不安が募っていきました。そして実際に担当してみると、想像以上に大変でした。とはいうものの、第31期事務局担当の大江朋子先生（帝京大学）より詳細な引き継ぎをしていただき、その後も今に至るまでサポートを続けてくださり大変助かっております。また、大江先生が2年前の会報で「どこにいても誰でもできる事務局担当」という目標を記されていましたが、それを達成するための事務局業務のスリム化に向けた大江先生をはじめ歴代の事務局担当の先生方のさまざまな取り組みの跡を、引き継いでいただいた資料より確認することができ、改めて感謝の思いを抱いています。今期の事務局も同じ目標を引き継いで共有し、粛々と（これが一番苦手なのですが）取り組みを続けていきたいと思っております。そのために、事務局業務を長らくご担当いただいている古川佳奈様（国際文献社）と、新しい職場に赴任した直後であったにも関わらず事務局幹事を快く引きうてくれた森下雄輔先生（大阪国際大学）のお力を最大限に借りたいと思っております。

コロナ禍になり、学会大会も各種委員会や理事会もオンラインで実施されるようになりました。はじめはそれに抵抗を感じたものの、徐々にその便利さに気づかれたという会員の皆様も多いのではないのでしょうか。もうわざわざお金や時間をかけて遠くから発表や会議のために集まらなくてもいいのではないかというご意見もあろうかと思っております。それは同時に学会の在り方、少し大げさですが存在意義を問うものでもあったのではないのでしょうか。そういうとネガティブですが、逆に学会が成長する契機であると捉え、微力ながら西田会長をはじめ第32期の常任理事の先生方とともに頑張りたいと思っております。会員の皆様もどうぞご協力よろしくお願いたします。

(たにぐち じゅんいち・帝塚山大学)

## 編集担当

結城 雅樹



ふだんならば、小粋なジョークの一つでも披露し、皆さんを笑顔にしてから挨拶を始めたことでしょう。しかし、自分の守るべき街が存亡の危機に直面している今、そんな小細工をすべきではありません。

本学会の学術誌「社会心理学研究」の年間投稿総数は、2011年度と2013年度の47件から、2021年度は20件、2022年度は24件まで落ち込みました。掲載数も減少し、第38巻（2022年度1号～3号）では資料論文を5編しか掲載できませんでした。優れた足跡を残した先輩方が議論を戦わせ、読者を興奮させたあの頃の姿が失われつつあります。（このような中、論文を投稿いただいた先生方には、心から御礼を申し上げます。）

社会心理学は、幅広い人間・社会科学諸領域の結節点となるポテンシャルを持つ学問です。Kurt Lewin (1936) が喝破したように、人間の心と行動、そして人間の社会を理解するためには、心と社会の相互作用の理解が不可欠だからです。それゆえ、社会心理学の主要な機関誌が衰退することは、この領域のみならず、人間・社会科学全体の衰退につながる深刻な事態といえます。

この度、そんな焼け野原の復興をお引き受けすることとなりました。幸運にも、副編集委員長の清水裕士先生、編集幹事の朱一鳴先生、編集事務センターの山田桂子様、そして錚々たる顔ぶれの編集委員の先生方といった力強い仲間にも恵まれました。先日開催した第1回編集委員会では、委員の先生方から改革の方向性についてのご賛同に加えて様々なご提案をいただき、明るい展望を得ることができました。先輩方の遺産を生かしつつ、これからどのような街をどのように築いていくかを、皆で考え、動き出しています。

そうした動きの第一弾として、この度、本誌の査読方針の見直しを行うこととなりました。具体的な方針については、本会報の記事『「社会心理学研究」の査読方針の見直しについて』をご覧ください。中でも重要なのは、減点主義から加点主義への査

読ゴールの転換です。学会誌の使命は、完璧な論文を出版することではなく、最低限のクオリティコントロールをしつつも、少しでも有益な点を持つ論文が公表され、後続の研究によってその限界が克服されていくという科学の発展サイクルを支えることです。このような視点の転換により、会員の皆様の情熱と努力が込められた研究成果の発表の場として、本誌をふたたび選んでいただけるようになるかと信じています。初学者の皆さんによる初めての論文から、経験豊かな先生方の知識と洞察が余すことなく表現された啓蒙的な論文まで、幅広く掲載するフォーラムとしての役割を整えていきます。

こうした試みを通じて、人間・社会科学の中心にいるべき社会心理学の発展に微力ながらお役に立てればと思っております。会員の皆様からも、ぜひ忌憚のないご意見・ご提案を、そして何よりも論文原稿の投稿をお待ちしております。きびだんごは差し上げられませんが、一緒に未来を作っていきましょう。

(ゆうき まさき・北海道大学)

### 『社会心理学研究』の査読方針の見直しについて

本学会が発行する『社会心理学研究』では、近年の投稿数の減少に対応するとともに、社会心理学および関連領域のさらなる活性化に寄与するため、査読方針の見直しを行うことになりました。

今回の見直しの要点は、1)審査基準の目標設定と、2)審査期間の短縮化です。その具体的な項目として、減点主義から加点主義への査読ゴールの転換や、主査の権限と責務の明確化などが含まれます。これらを通じて、会員の皆様の研究成果がより迅速かつ広範に公表されることを支援し、社会心理学および関連領域の活性化を図っていきます。

新方針の全文は、こちらのリンクから閲覧いただけます。

[https://www.socialpsychology.jp/journal/pdf/peer\\_review\\_policy.pdf](https://www.socialpsychology.jp/journal/pdf/peer_review_policy.pdf)

今後、新規投稿論文を担当いただく審査者の先生方には、新方針に都度お目通しいたごき、リマインドさせていただきます。

最後に、会員の皆様に、本誌への投稿のメリットを少しだけ宣伝させていただきます。

本誌は、掲載料無料の、審査付きオープンアクセスジャーナルです。英文論文も受け付けています。購読料・掲載料高騰の折、大変お得な選択肢となっています。

従来通りですが、日本語による事前登録（プレレジ）論文も歓迎しています。

皆様の論文投稿を、編集委員一同お待ちしております。

### 研究支援担当

このたび、第32期の研究支援を担当させていただくことになりました。研究支援では、大学院生・若手研究者海外学会発表支援制度と若手研究者奨励賞の選考を担当しています。前者は2005年の大学院生海外学会発表支援制度から数えてもうすぐ20年目を迎え、後者は20世紀後半から始まり約40年の歴史を持つ制度です。

このように長年にわたり学会のみなさまによって育てられてきた制度ですが、ここ数年のコロナ禍や国内外情勢の研究環境をとりまく大きな変化を踏まえ、少しずつではありますが、実態に即した改定がなされてきています。たとえば、2022年度は、特例措置として海外渡航や学会参加を伴わない研究への助成として「院生・若手研究者助成（オンライン調査・実験対象）」を実施、また、「大学院生・若手研究者海外学会発表支援制度」の規定の変更が行われ、海外渡航を伴わないオンラインでの海外学会への参加にも支援の幅を広げています。

しかしながら、昨今の不安定な経済状況や雇用環境、研究環境を鑑みると、現在の制度による支援が、それを必要とする会員に十分に行き届いているかといえば、まだまだ「Yes」とは言い切れない部分があるかと思えます。また、現在の支援は主に金銭的な援助が中心となっていますが、それ以外の必要な支援にはどのようなものがありうるか、またそのような支援を行う体制づくりを今後どうしていくかについても、検討しても良い時期にあるかと思えます。

学会は世代を超えて同じ学問を志す会員たちが集う場であり、学会の継続的な発展には、若手会員の活動が活発であること、そして、すべての会員が研究を十分に全うするために互いに支え合うことが不可欠と考えられます。若手の方もそうでない方も、この制度を支え、さらに改善するためのお知恵を貸していただけますようお願いいたします。そして、院生・若手会員のみなさま、ぜひ制度への積極的な応募をお待ちしています。どうぞよろしく願います。

(やました れいこ・東京経済大学)

山下 玲子



## 学会活動担当

西村 太志



今期学会活動委員会を担当させていただきます西村です。この委員会は「会員の研究活動を推進発展させるための仕掛けを総合的に検討し、学術動向と需要に応じて、時宜にかなった内容の企画を立案し実施する」ことを目的としています。

With コロナの時代となり、この3年間での様々な制約から社会の行動様式は解放されていきます。アクリル板やビニールシート、検温器具は撤去されはじめ、マスクの着用も個人の判断となりました。そのため、自由な対面コミュニケーションに制約をかける必要性がなくなります。このことは、ここ数年オンラインでの開催が前提となり進めてきた様々な企画イベントの考え方を元に戻すものといえるでしょう。一方、オンライン開催は、イベントへの参加者の増加をもたらしました。2021年3月と2022年3月に開催された春の方法論セミナーには、ウェビナーで400人以上の参加がありました。また、ハイブリッド形式で2023年3月に実施した社会心理学会春の方法論セミナーでは、当日の対面参加予約者/当日参加者は34/25名であったのに対して、同時配信したウェビナーの事前参加予約者/当日参加者で536/322名でした。コロナ前の2019年3月実施の方法論セミナーでは、およそ100名程度の参加人数だったように記憶しています。このような傾向も踏まえながら、次回の方法論セミナー（2024年3月実施を予定）でもハイブリッド形式での実施を予定しています。内容はこれから検討していきますが、社会心理学の社会的価値をさらに高めるようなものにできればと考えています。

また、対面でのイベント開催機会の減少は、特に世代間の交流を難しくしたと思います。若手研究者と中堅、ベテラン研究者が研究や人材採用等もふくめてマッチングできるような機会を、2年間の任期の間に設けられればと思っています。

本委員会は発足して4期目となりました。これまでの委員長・委員のみなさんの活動の上に作られた実績を基に、今期も更なる進展をすすめて、学会活動の活性化に寄与したいと考えています。学会活動委員には、古谷嘉一郎（関西大学）、谷田林士（大正大学）、小森めぐみ（淑徳大学）、白岩祐子（埼玉県立大学）古村健太郎（弘前大学）、原田千佳（名城大学）の6人の先生方に就任いただきました。みなさん研究・教育活動にご多忙な中、二つ返事で就任いただき、大変感謝しております。会員の皆様におかれましては、企画やリクエストがございましたら、いつでも私や委員にご連絡いただくと幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。

(にしむら たかし・広島国際大学)

## 広報担当

内田 由紀子



この度、広報を担当させていただくことになりました、内田です。就任後初めての大きな仕事がこの「会報」作りでした。お忙しい中、原稿をお寄せいただいた先生方に感謝しております。

私はこれまでSNSからの発信などもほとんど行ってこなかったため、広報人材として適任かといわれると全くそうではありません。しかしながら、逆に私のような人間でもアクセス可能で、活動の裾野を広げることがまさに「広報」の役割かもしれないと考えて、このミッションをお引き受けすることにしました。そして、これまで学会の広報活動にいろいろと助けられてきましたので、この場で新たなことを学び、ご恩返しできればと考えています。

また、前広報担当理事の三浦先生を筆頭に、これまでの広報委員の先生方が構築されてきた様々な仕組みや価値観共有の恩恵にあずかることができ、まさに巨人の肩の上に立つような形で引継ぐことができたことに感謝するばかりです。学会のウェブサイトは近々リニューアル予定で、これについては引き続き三浦先生にご担当いただいております、その多大なるご尽力に感謝を申し上げます。

広報委員会には前期から引き続いて近畿大学の杉浦仁美先生、奈良女子大学の竹橋洋毅先生にご担当いただいております。また、新任として京都文教大学の浅井暢子先生、滋賀県立大学の山田歩先生にご参画いただくことができました。皆様それぞれ大変お忙しい中、快くお引き受けいただきましたことに感謝いたします。非常に心強いチームとなりましたので、私も一層頑張っていきたいと思っています。

広報委員に就任してから様々なことを考える機会をいただきました。まず、複数の媒体で国内外の情報を拾うことができる中、学会として会員の皆様に有益な情報を発信・配信することの意義についてです。これについては、情報を精査してまとめ、学会として周知することが非常に重要だと感じています。たとえば今回の会報では編集委員からの情報などは重要なもので、適切な形で会員の皆様に周知することの意義を再認識しました。次に、SNSをめぐる情勢です。学会の広報でもTwitterは活用していますが、Twitter社の方針に影響を受けることもあり、その動向を見極めていく必要があります。最後に、会員情報の取り扱いです。これまで会報には会員の異動情報を掲載してきましたが、会員以外も見られる会報に、こうした情報を載せることが時代

に合わなくなってきました。そのため、今回の会報から掲載を取りやめることといたしました。会員の皆様にはご不便をおかけしますが、どうぞお願いします（会報の最後のページに案内を記載しました）。

皆様のご活動や業績をこれからもよい形で発信していけるようにしたいと思いますので、情報提供をお待ちしています。

（うちだ ゆきこ・京都大学）

## 大会運営担当

小川 一美

第32期の常任理事として大会運営の担当を務めることになりました。「日本社会心理学会大会運営委員会規程」によると、「年次大会のあり方を総合的に検討するとともに、各年次大会の主催者の調整と内定、主催者の活動への協力と補助、大会運営に必要な物品と情報の保守・点検・伝達」が業務とのことです。強力な大会運営委員の皆様がいらっしゃいますので、大会運営委員の皆様と共に、主催校を全力サポートし、年次大会の円滑な運営を目指していきたいと思っております。



さて、会員の皆様の中に「実は大会を主催してみても良いかなあと思っている」とか「大会の主催に興味がある」という方はいらっしゃらないでしょうか。もしかしたら、「大会を引き受けると所属機関からご褒美がもらえる(!?)、所属機関が喜ぶ」なんていう方もいらっしゃるかもしれません。このような方は、是非、小川までご一報をください！まずは、年次大会を主催する場合のスケジュール等々の情報をご提供させていただきます。9月7日、8日に開催される第64回大会では、主催校である上智大学の先生方だけでなく、他大学の先生方も大会準備委員としてご尽力くださっています。研究仲間が集まって大会を主催することや、複数校で協力して年次大会を開催することも可能です。大会主催に関するご質問、ご相談があれば、お気軽に小川までご連絡ください。9月7日は対面開催が予定されておりますので、上智大学の会場でお声がけくださっても結構です。

ここ数年の我々を取り巻く環境の変化により、大会運営においても多様な手段が取られるようになってきました。コロナ禍にもかかわらず大会をなんとか開催してくださった第61回大会から第63回大会、そして今年の第64回大会の大会準備委員の皆様は、コロナ禍以前とは異なる様々な工夫をしてくださりました。コロナによる制約がなくなったとしても、ただ元に戻すのではなく、良かったものは継続し、今後も柔軟な発想で多様な手法を取り入れていけるよう、主催校をサポートしていきたいと考えております。

大会開催は会員の皆様のご協力が不可欠です。何卒よろしくお願い申し上げます。

（おがわ かずみ・愛知淑徳大学）

\*\*\*\*\*

## 日本社会心理学会第64回大会へのお誘い

樋口 匡貴

9月7日（木）、8日（金）に行われる第64回大会がいよいよ3ヶ月後に迫ってきました。大学関係者はまだ前期の真っ最中でしょうから9月は遠い彼方にある気がしているかもしれませんが、実際にはもう目前です。今年度大会は東京は四ツ谷にある上智大学およびオンライン上を会場として開催いたします。

今年度の大会は例年とは少し異なり、「ハイブリッド大会」として開催します。大会1日目（9/7木）は、上智大学の会場にて、対面でのポスター発表、総会、シンポジウム、そして後述のECR企画を行います。さらにポスター発表以外についてはZoomを用いてオンラインでライブ配信いたします。また大会2日目（9/8金）には、口頭発表および自主企画ワークショップを完全オンラインにて実施いたします。ポスター発表、口頭発表については、大会サイトのシステムを用いたオンラインディスカッションができるように準備を進めています。

今大会では、特にキャリア初期の研究者（Early Career Researcher: ECR）の方々に対して私たちが何をできるかを考えました。まだいろいろな人とのつながりができていないECRの方々からは、オンライン大会だと気軽な研究相談がしにくい、そもそも人とのつながりを作ること自体が難しい。そんなご意見を目にしました。そこで本大会で考えたのがECR企画です。ECRの方々に会場にて対面でのライトニングトークをしていただき、それをライブ配信します。どうぞ多くのおみなさま、新たな研究の萌芽をご覧ください。さらにその内容について、ポスターを用いてディスカッションしていただく機会を設けます。ここには発表者ご本人が指名したコメンテーターに参加を依頼することになっています。指名された先生方は、どうぞ力を貸してください。またそれ以外の先生方も、どうぞ積極的なECRの方々とのディスカッションをお楽しみください。

さて2020年からのコロナ禍の中で第61回、62回大会が工夫して作り上げてきたオンライン大会の工夫は、時間的・空間的な制約が大幅に取り払われた、学会の新しい姿を見せてくれました。また第63回大会における直接顔を突き合わせてディスカ

セッションを行う形態は、研究活動の愉悦を改めて思い出させてくれました。こうしたこれまでの工夫の「良いところ取り」を目指したのが本大会です。気軽に参加できて、かつきちんと楽しい！そんな大会にできるように準備していきたいと思います。幸いにして役者は揃いつつあります。締め切りまでに、ポスター発表 230 件、口頭発表 41 件、ECR 企画 13 件、ワークショップ 4 件のお申し込みをいただきました。これらの素晴らしい研究の数々とともに、楽しい時間を過ごしましょう。

最後になりますが、本大会は大会の準備も（ほぼ）オンラインで行なっています。準備委員会のメンバーは必ずしも開催校の構成員ではありません。様々な所属の準備委員が様々な意見を出し合い、そして良い大会を開催できるよう準備しています。私たち自身が大会の準備自体を楽しみながら進めています。最後に準備委員メンバーからいただいた一言ずつを添えて、大会への勧誘の挨拶とさせていただきます。第 64 回大会にて、お会いしましょう！

(ひぐち まさたか・上智大学)

-----

・会場担当です。大会初日は 2017 年竣工の上智大学四ツ谷キャンパスの新しいシンボル（6 号館ソフィアタワー）の 4 階フロアにて、すべてのプログラムを実施いたします。学会初のハイブリッド大会となりますが、オンラインおよび対面にて、会員の皆様をお迎えできますことを楽しみにいたしております。（上智大学 杉谷陽子）

・休憩室長です。昨年は会期直前に COVID-19 に罹患し阿闍梨餅を食べ損ねました。食物の恨みを晴らすべく、一日だけの開室ですが、皆さまの疲れを癒やし、喉と胃を潤し、社会的交流を促進し、研究の飛躍を生むような休憩室を目指して準備を進めて参る所存です。ご来室を心よりお待ち申し上げます。（慶應義塾大学 平石界）

・「番頭」担当です。といっても運営や予算の実権を握り暗躍するのではなく、各種トラブルに適切に対応する役割を担っています。今のところ委員長をはじめ優秀な方々のおかげであくせくせずに済んでいます。ありがたいことです。会期中は受付周辺にいますので、何かお困りのことがあればご相談ください。（昭和女子大学 藤島喜嗣）

・シンポジウム企画担当および遊軍です。2016 年大会で準備委員長をした時の経験が忘れられず、今回もいろんなアイデアをチームワークで良い形に仕上げるプロセスを満喫しています。全会員にご満足いただくのは無理ですが、一緒に楽しんでくださる方が少しでも多くいらっしゃることを願っています。（大阪大学 三浦麻子）

・ECR 企画担当です。そして私も ECR かつ本企画発表者の一人です。既に本企画には沢山の魅力的な発表登録が集まっております。ご参加の皆様は是非会場で議論していただき、発表者達のことを覚えていってください。そして大会終了後も、発表者達がどんな研究をしていくのか楽しみにしててください。（上智大学 山本晶友）

大会 Web サイト：<https://www.socialpsychology.jp/conf2023/>



四ツ谷交差点からの上智大学



上智大学正門



会場予定地

この辺りに受付を設置する予定です

## 第10回春の方法論セミナー報告・参加記

### 報告

第10回春の方法論セミナーは、「APA マニュアルにみる質的研究の評価の視点と研究の最前線」と題して2023年3月13日(月)に対面(大正大学10号館)+zoom中継のハイブリッド方式で開催されました。ご参加くださった方の中から参加記の執筆をお願いいたしました。

### 参加記

前田 楓

私は、今回のセミナーの企画趣旨にある言葉を借りれば、まさに「いざ自分が質的研究を行うとなると、やや身構えてしまう」人物でしたが、参加して本当に良かったと感じています。先生方のお話は、初学者の私にとってわかりやすく、また興味深いものばかりでした。

まず、能智先生のお話により、質的研究の全体像が明確に提示されました。特に、質的研究論文の執筆スタンダードについて丁寧に解説されていた点が印象的でした。専門とする方による解説を聞く機会に恵まれると、解説書の文章を目で追うだけでは知り得ないさまざまな事柄も見え、より理解を深めることができると感じます。ただ、それゆえに、例えば「現象の抽出方法を工夫する必要がある」というお話からは、質的研究の魅力と同時に、評価基準の難解さも見えてきました。

続く大橋先生には、具体的な事例とともにディスコース分析の実際についてもお話いただき、量的データの分析との相違点について理解を深めました。質的研究においては、データと向き合う時間が長く、その過程において、リサーチ・クエスチョンや研究デザインが変わることがある、というお話が特に印象に残っています。私自身、これまでの研究において、データと十分に向き合ってきたか、データと自分の解釈とを行ったり来たりするなかで自身のリサーチ・クエスチョンや研究デザインをじっくりと見直してきたか、と自問する機会もいただいたように思います。

最後の抱井先生のお話では、混合研究法について、その定義や実施の手順などを詳細にご説明いただきました。先生のお話によれば、混合研究法では「量的研究と質的研究のそれぞれの結果から得た推論の統合を通じて生成される結果」が重要である、ということでした。私自身、シナリオによる条件操作によって人々の認識が変化するか否かを検討した実験を行った経験があります。その結果としては、シナリオの効果の有無のみを報告しており、どのような人にはより効果があつて、どのような人には効果がみられにくいのか、などの詳細な報告にはいたっていませんでした。条件ごとの平均値の比較だけでは見過ごしてしまうようなデータを「すくいあげる」ことこそが、研究知見の応用可能性、さらにはその後の研究の展開に影響する可能性は十分にあると感じました。その意味で、混合研究法による量と質を補完しあうような分析に大きな意義があると再認識しました。

私は現在、共同研究者の先生方とヘルプマークに対する人々の理解を促すための研究を進めています。いまだ周知や理解が十分でないヘルプマークについて、マークを利用している人と利用していない人との認識の「ずれ」を検討したい、そして、より効果的にヘルプマークを普及していくための手立てを考えたいと思っています。ただ、そうした研究を展開していくなかで、あくまで研究者の側が用意した質問に対する量的な回答データのみから考えられる範囲の限界を痛感しながらも、それを乗り越える術を持たないままでした。今後は、今回のセミナーで学んだことを活かしながら、データを「すくいあげる」ための実践について工夫したいと考えています。

最後になりましたが、今回のセミナーを企画・運営してくださった先生方、貴重な話題を提供してくださった先生方に、深く感謝いたします。

(まえだ かえで・立教大学)

セミナーWebサイト：<https://sites.google.com/view/jssp2022seminar10>

## 第32期役員選挙のご報告

### 結果報告

第31期選挙管理委員会委員長 村田 光二

第32期の役員選挙は、第63回大会総会で承認いただきました役員選挙規程に基づき実施いたしました。また、先回に引き続き投票方法はオンライン投票となりました。投票期間は2022年11月1日から11月21日までとし、期間中、投票を促すメールを3回お送りしました。役員選挙の開票に際しては、選挙管理委員4名（村田光二、杉谷陽子、村山綾、大江朋子）と事務局担当（古川佳奈）が集計結果を確認し、当選者、次点者、次々点者を決定いたしました。いずれの選挙におきましても、同数の得票に関しては、複数の選挙管理委員により抽選を行いました。以下、開票結果をご報告いたします。

役員選挙における有権者数は1294、投票総数は293、投票率は22.6%となりました。投票率は第28期が23.4%、第29期が23.3%、第30期が26.7%、第31期が19.9%でしたので、今期の選挙では投票率がやや回復したといえます。区分ごとの得票数、投票率は、表1をご覧ください。開票は2022年11月22日に、会長、全国区理事、地方区理事、監事に分けて行いました。それぞれの区分での開票時点または最終時点での当選、次点、次々点までの結果は、表2から表8をご覧ください。得票が同数の場合、重複しての当選の場合などについては、役員選挙規程に則って処理しました。開票終了後、当選者に就任の諾否を尋ねたところ、すべての当選者から就任の承諾を得ることができ、2022年12月6日にすべての役員（会長、理事、監事）が確定しました。

第32期の会長に当選した西田公昭氏から、編集担当常任理事として結城雅樹氏、事務局担当常任理事として谷口淳一氏、任意の担当の常任理事として山下玲子氏の指名がありました(選挙規程第10条第2項)。2022年12月14日から2022年12月21日の期間に、理事による信任投票を実施しました。その結果、不信任0票、棄権2票、白票0票、その他すべて信任票となり、3氏とも信任されました(表9)。

残り3名の常任理事を選出するために、2022年12月26日から2023年1月9日まで理事による互選を実施しました。その結果、次点までが決まり、当選した上位3名に就任の諾否を尋ねたところ、すべての当選者から就任の承諾を得ることができ、最終的に1月11日をもって、内田由紀子氏、西村太志氏、小川一美氏の3氏の常任理事を確定しました(表10)。

以上で、第32期の役員が全員確定したことをご報告いたします。

### 選挙管理委員会からのコメント

選挙管理委員長に就任して最初に、前期の委員長から引継ぎをしてもらいたいと感じました。しかし、選挙を終えてみると、終了から1年半後に引き継ぎをすることはあまり得策では無いと思いました。むしろ、単にこの報告事項やコメントを新規委員長が就任した時点で、情報として得られるよう手続きを整えていただきたいと思います。

次に、「選挙を早めに進めるよう」常任理事会側から要請がありました。実際進めてみると、選挙規程の第12条に縛られ、そのたびに常任理事会の承認を得る必要が生じました。要請時点で、「日程の設定は選挙管理委員会側に一任する」としていただきましたかと思われ、現時点ではこの規程を改定していただきたいと思います。なお、投票翌日にオンライン開票を実施したなど、選挙管理委員のご協力をいただき、日程を進めるためにできるだけ努力しました。

投票率を上げるために試みたことは、まず大会時の理事会で理事に選挙活動を要請したことです。身近な会員に投票を呼びかけてもらうこと、院生など会員となつてからの期間が短い人に必要に応じてアドバイスしてあげるをお願いしました。次に、期間中のリマインドメールの表現を工夫しました。投票率が低いことを伝えるよりも、今からでも投票できること、投票することが役立つことを中心に注意を引きやすい表現を心がけました。

学会の役員選挙は「立候補者がいない選挙」ですので、通常選挙と異なります。誰に投票したらよいかわかりにくい選挙であって、投票率が低いことはある意味当然かもしれません。それでも「誰に投票したらいいのか」会員に少しでも気づいてもらう方法を考え、自分たちの代表者をより適切に選んでいくことが、組織を活性化するためにも必要だと思います。そのための方策を考えることは理事会マターだと思いますが、私の方で今思いつくことは、理事や各種委員会の委員の方たちが会報やメールニュースで、活動報告や意見表明をする機会を増やしたらどうかと思います。意見表明についてはもちろん会員にも機会を常に与えたらよいと思います。

今回は、理事・会長選挙、常任理事選挙とも辞退者が出ませんでした。当選者や会員皆さまのご協力のおかげだと思います。学会運営を担っていただいている方々、実質的に選挙活動をしていただいた関係各位に感謝いたします。

(むらた こうじ・成城大学)

表1 第32期役員選挙投票数

区分	有権者数	投票者数	投票率
会長	1294	293	22.6%
全国区理事	1294	293	22.6%
地方区理事(北海道・東北)	92	28	30.4%
地方区理事(関東)	602	119	19.8%
地方区理事(中部・近畿)	453	107	23.6%
地方区理事(中国・四国・九州・沖縄)	140	37	26.4%
監事	1294	293	22.6%
海外	7	2	28.6%

表2 第32期役員選挙開票結果(会長)

氏名	得票数	順位	当選者
西田 公昭	105	1	○
三浦 麻子	24	2	次点
岡 隆	18	3	次々点
小計	147		
次々点未満	140		
白票	6		
合計	293		

表3 第32期役員選挙開票結果(全国区理事)

氏名	得票数	順位	当選者
谷口 淳一	69	1	○
結城 雅樹	56	2	○
唐沢 かおり	43	3	○
山下 玲子	38	4	○
石井 敬子	16	5	○
内田 由紀子	16	5	○
清水 裕士	14	7	○
坂田 桐子	12	8	次点
石黒 格	11	9	次々点
小計	275		
次々点未満	257		
白票	54		
合計	586		

表4 第32期役員選挙開票結果  
(地方区理事:北海道・東北)

氏名	得票数	順位	当選者
古谷 嘉一郎	5	1	○
竹澤 正哲	4	2	次点
福野 光輝	4	2	次々点
小計	13		
次々点未満	14		
白票	1		
合計	28		

注:第2位は抽選による。

表5 第32期役員選挙開票結果  
(地方区理事:関東)

氏名	得票数	順位	当選者
大高 瑞郁	29	1	○
高橋 尚也	29	1	○
山下 玲子	22	3	全国区で 当選
宮本 聡介	12	4	○
尾崎 由佳	11	5	次点
樋口 匡貴	10	6	次々点
小計	113		
次々点未満	194		
白票	50		
合計	357		

表6 第32期役員選挙開票結果  
(地方区理事:中部・近畿)

氏名	得票数	順位	当選者
内田 由紀子	45	1	全国区で当選
小川 一美	34	2	○
石井 敬子	8	3	全国区で当選
清水 裕士	6	4	全国区で当選
谷口 淳一	4	5	全国区で当選
村山 綾	4	5	○
唐沢 穰	4	5	次点
池上 知子	4	5	次々点
小計	109		
次々点未満	74		
白票	31		
合計	214		

注:第5位は抽選による。

表8 第32期役員選挙開票結果(監事)

氏名	得票数	順位	当選者
唐沢 かおり	20	1	全国区で当選
松井 豊	8	2	○
唐沢 穰	8	2	次点
池上 知子	5	4	次々点
小計	41		
次々点未満	184		
白票	68		
合計	293		

注:第2位、第4位は抽選による。

表9 第32期役員選挙開票結果(常任理事信任投票)

氏名	得票数*	信任
結城 雅樹	26	○
谷口 淳一	26	○
山下 玲子	26	○

\*棄権2票

表7 第32期役員選挙開票結果  
(地方区理事:中国・四国・九州・沖縄)

氏名	得票数	順位	当選者
西村 太志	9	1	○
池田 浩	6	2	次点
中西 大輔	3	3	次々点
小計	18		
次々点未満	18		
白票	1		
合計	37		

表10 第32期役員選挙開票結果(常任理事)

氏名	得票数	順位	当選者
内田 由紀子	16	1	○
西村 太志	15	2	○
小川 一美	14	3	○
高橋 尚也	2	4	次点

\*\*\*\*\*

## 『社会心理学研究』掲載（予定）論文

第39巻第1号（2023年7月刊行予定）

### 【原著論文】

温 若寒・三浦 麻子 多次元オンライン脱抑制尺度（MMOD）の作成および妥当性と信頼性の検討  
正木 郁太郎 職場において感謝がワークエンゲイジメントと文脈的パフォーマンスに与える効果：  
応答曲面分析を用いた検討

### 【書評】

上市秀雄（著）『後悔を活かす心理学：成長と成功を導く意思決定と対処法』（2022，中央公論新社） 評：小宮 あすか  
江崎貴裕（著）『数理モデル思考で紐解く RULE DESIGN：組織と人の行動を科学する』（2022年，ソシム） 評：三浦麻子

\*\*\*\*\*

## 会員異動の掲載停止につきまして

これまで会報におきまして、会員の異動情報を掲載させていただいておりました。しかしながら会報が会員以外にも閲覧できる中、退会についてなど特に個人の情報を含むこと、会員情報を知る手段はほかにもあることから、常任理事ならびに広報委員会で協議しまして、会員異動情報の公開はしないことといたしました。会員情報は学会ウェブサイトの会員専用ページ内でログインいただき、「会員名簿の検索」からご参照いただけます。ご不便をおかけしますが何卒よろしくお願い申し上げます。